

新約聖書の中の祈り 第19回

□「新約聖書の中の祈り」のアウトライン

1. イエスの祈り
2. 福音書における他の祈り
3. 使徒の働きにおける祈り
4. 書簡における祈り

□「書簡における祈り」・・・パウロの書簡の中から、23の祈りの事例を見る。本日は、第14から第20の、7つの事例。

14. 《着実に祈ることを続けよ》 コロ4:2~4 たゆみなく祈りなさい。感謝をもって祈りつつ、目を覚ましていなさい。同時に、私たちのためにも祈ってください。神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように祈ってください。この奥義のために、私は牢につながれています。また、私がこの奥義を、語るべき語り方で明らかに示すことができるように、祈ってください。

- (1) 「たゆみなく祈りなさい」・・・原文を直訳すると「続けなさい、着実に、祈ることにおいて」。パウロがそうしていたように、コロサイの信者たちにも勧められている。祈ることが、日々の信仰生活の必須項目になるように。
- (2) 「感謝をもって祈りつつ」・・・祈りが日々の信仰生活の必須項目になるために必要なことは何か。それは、神に対して感謝の思いを持つこと、そして祈りを通して神に感謝をささげることである。神に近づくには、感謝のささげ物をもっていかねばならない。
- (3) 「同時に、私たちのためにも祈ってください」・・・ここでのパウロの特別な求めは、「私たち（パウロとテモテ）のためにも祈ってほしい」。その祈りの内容は、次の3つ
 - ① 神がみことばのために門を開いてくださるよう
 - ② パウロたちに「キリストの奥義」を宣教する機会がさらに与えられるよう
 - ③ パウロたちがこの奥義を、明確に、そして大胆に語るができるよう
- (4) キリストの奥義とは、深遠な教理、神秘的な秘密の儀式というようなものではない。旧約聖書では明らかにされていなかったが、新約聖書において初めて啓示されたことをいう。例えば、異邦人の救いについて。メシアによって異邦人が救われるであろうことは旧約聖書で預言されていた。しかし、異邦人が割礼を受ける必要はないこと、そして異邦人信者はユダヤ人信者とともに神の約束の共同相続

人となることは、新約聖書において初めて啓示された。これは異邦人にとって、良き知らせ、福音である。また異邦人と敵対してきたユダヤ人にとっても福音である。パウロが福音宣教するときには、必ず「キリストの奥義」を語り、教えた。

15. 《霊的成長を願う祈り》 コロ 4:12 あなたがたの仲間の一人、キリスト・イエスのしもベエパフラスが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが神のみこころのすべてを確信し、成熟した者として堅く立つことができるように、あなたがたのために祈りに励んでいます。

(1) 「あなたがたのために祈りに励んでいます」・・・原文を直訳すると、「いつも格闘しています、あなたがたのために、彼の祈りにおいて」。エパフラスは、コロサイの教会の信者たちのためにいつも祈っていた。誰かのために祈るということは、その誰かのために霊的な戦いをするのである。

(2) エパフラスが祈っていた内容 2つ

① 彼らが堅く立つことができるように＝霊的に成長すること

② 彼らが神のみこころのすべてを確信できるように＝神のどのようなみこころに対しても神を信頼し、それが最善であることを確信することができるように。→ 信者はそのような確信があるときに、神の導きを受け取っていくことができる。

16. 《感謝をささげる祈り》 Iテサ 1:2~3 私たちは、あなたがたのことを覚えて祈るとき、あなたがたすべてについて、いつも神に感謝しています。 私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。

(1) この箇所もまた、パウロが地域教会のために祈っている。ここでは、テサロニケというマケドニアの町の信者たちのための祈り。

(2) 「いつも」とあるように、パウロは各地の地域教会の信者たちのことをいつも覚えながら、日々祈りをささげていた。

(3) 祈りの内容は、感謝をささげる祈り。その理由は 3 節に 3つ、波線部に記されている。原文直訳すると

① 働き・**信仰**の

② 労苦・**愛**の

③ 忍耐・**希望**の・私たちの主の、イエス キリスト」

(4) テサロニケの信者たちが示した働き、労苦、忍耐のゆえに、感謝の祈りをささげている。これらは確かに信者たちの行いである。しかし、その行いが何から出て来たのか、何によって支えられていたか、パウロはここではっきりと教えている。

信仰と**愛**と**希望**である。I コリ 13:13 ではパウロは次のように記している。「こ

ういうわけで、いつまでも残るのは**信仰**と**希望**と**愛**、これら三つです。その中で一番すぐれているのは**愛**です。」

17. 《夜も昼も、熱心に祈る》 Iテサ3:10 私たちは、あなたがたの顔を見て、あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるようにと、夜昼、熱心に祈っています。

(1) テサロニケの信者たちのために祈り

(2) 「夜昼」・・・頻度が高い祈り、そして祈りの時間帯は、夜も昼も

(3) 9節aでは「あなたがたのことで、どれほどの感謝を神におささげできるでしょうか」とあるように、祈りの内容はまず、感謝。そして9節bでは、「神の御前であなたがたのことを喜んでいる、そのすべての喜びのゆえに」とあるように、喜びがあった。感謝と喜び、これが信者を夜昼の熱心な祈りへと導く。

(4) 10節での祈りの内容・・・2つ

① 「あなたがたの顔を見ることができるよう」・・・パウロたちが再びテサロニケに行くことができるように、そしてテサロニケの信者たちと交わることができるように

② 「あなたがたの信仰で不足しているものを補うことができるように」

(5) 第2次伝道旅行でのテサロニケでの宣教活動は、短期間であった(使徒17:1~10)。イエスがメシアであること、メシアの死と復活については教えることができた(使徒17:3)が、メシアの再臨については詳細には教える時間がなかった。そのことが、「あなたがたの信仰で不足しているもの」である。パウロはそれを補うために、テサロニケに再び行こうとしたがそれができなかった(Iテサ2:15~18)。そのような経緯があって、パウロはこの書簡を書いて、メシアの再臨について教えている。

18. 《祈ってください》 Iテサ5:25 兄弟たち、私たちのためにも祈ってください。

(1) 5:23~24 パウロはテサロニケの信者たちのために祈っている。「平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。」

(2) 25節では、パウロは、テサロニケの信者たちに求めている。彼らもまた、パウロたちのために祈るように。

19. 《霊的成長を願う祈り》 IIテサ 1:10~12 その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます。そうです、あなたがたに対する私たちの証しを、あなたがたは信じたのです。こうしたことのため、私たちはいつも、あなたがたのために祈っています。どうか私たちの神が、あなたがたを召しにふさわしい者にし、また御力によって、善を求めるあらゆる願いと、信仰から出た働きを実現してくださいように。それは、私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって、私たちの主イエスの名があなたがたの間であがめられ、あなたがたも主にあつて栄光を受けるためです。

(1) 文脈

- ① 10節はメシアの再臨、とくに携挙について語る。
- ② 11節は、二重下線部「こうしたことのため」ということばで始まる。携挙の日を待ち望む信仰をベースにして、テサロニケの信者たちのために、いつも祈っている、と述べる。
- ③ そして、その祈りの内容を、11節で3つ、12節で2つ、合わせて5つ。
- ④ 12節は波線部「それは、〇〇ためです」と訳されているが、11節で祈った3つのことの結果、携挙の日にはこうなりますように、という祈りである。
- ⑤ 12節の中に、「私たちの神であり主であるイエス・キリストの恵みによって」と訳されている箇所は、「私たちの神と主イエス・キリストの恵みによって」と訳す方がよいであろう。

(2) 下線部「いつも」・・・1回だけでなく、頻度の高い祈り

(3) 二重下線部「こうしたことのため」・・・この祈りをする理由、あるいはこの祈りの基盤である。それは前の10節で語ったことを受けているので「こうしたことのため」とある。

- ① 10節「その日に主イエスは来て、ご自分の聖徒たちの間であがめられ、信じたすべての者たちの間で感嘆の的となられます」。
 - 「その日に主イエスは来て」とは、主イエスの再臨を指す。
 - 再臨は2段階に分けて行われる。第一段階は、教会の信者たちを迎えに来て天に引き上げる**携挙**、そして第二段階は、大患難期の末期に地上のイスラエル民族のところにお帰りになる**地上再臨**である。
 - ここは「ご自分の聖徒たちの間で」とあるので、教会の信者が対象であり、再臨の第一段階「携挙」である。
- ② 12節には「あなたがたも主にあつて栄光を受ける」とある。携挙のとき、主イエスは信者たちによってその栄光をほめたたえられる。同時に、信者たち自身も栄光を受ける。これは、信者が栄光の体を受けることである。私たちの今の体は弱く、病にかかり、年老いていき、やがて土に帰る。しかし、携挙のとき、私たちは朽ちることのない、死ぬることのない栄光の体を持つ。

(4) 祈りの内容 5つ 11節～12節

- ① 神が、あなたがたを召しにふさわしい者にしてくださいるように・・・信者たちが日々変えられてキリストに似た者となっていくことである。パウロはテサロニケの信者たちの霊的成長を祈っている。
- ② 神が、善を求めるあらゆる願いを実現してくださいるように・・・善を求める願いが実現するとは、良い行いをすることである。霊的成長は良い行いとなって現れる。
- ③ 神が、御力によって、信仰から出たあなたがたの働きを実現してくださいるように・・・たとえ良い行いのように見えても肉の思いでなされるものもある。それに対して、霊的成長の中で信者が行うわざは、信仰の行いである。それは、神の力によって導かれ、実行される。
- ④ 私たちの主イエスの名が、あなたがたの間であがめられますように・・・これは主イエスの再臨、とくに教会の信者たちにとって携挙の日のことである。もちろん、信者が霊的に成長する中では、信者は携挙の日を待つことなく、今でさえも、主イエスをほめたたえる者たちである。
- ⑤ あなたがたも主イエスにあって栄化されますように・・・携挙の日に信者たちが栄光の体を受けますように。これは神の約束である。必ずそのようになる。

20. 《祈ってください》 IIテサ 3:1～2 最後に兄弟たち、私たちのために祈ってください。主のことばが、あなたがたのところと同じように速やかに広まり、尊ばれるように。また、私たちが、ひねくれた悪人どもから救い出されるように祈ってください。すべての人に信仰があるわけではないからです。

(1) 「私たちのために祈ってください」・・・第一の手紙でも、パウロはまず信者たちのために祈っていることを述べたうえで、自分のためにも祈ってほしいと記していた。この第二の手紙でも同様である。ここでは特に、祈りの課題を明示している。

(2) 祈りの課題 2つ

- ① 主のことばが速やかに広まり、尊ばれるように。
- ② パウロたちが、理不尽な悪い人たちから守られるように。それはどういう人たちかというと、まずユダヤ人、イエスをメシアではないと否定してパウロたちを迫害するユダヤ人たちである。次に異邦人、彼らの宗教やオカルトで利益を受けているところに、パウロたちの宣教活動により真の神についての理解が広まっては困る人々である。神の目から見れば、いずれも信仰のない人たちである。「すべての人に信仰があるわけではないからです。」